眠っている資源の活用と住民参加のネットワークづくり

～大泉さくらガーデンヒルズプロジェクト構築の提案～

桜川市　地域おこし協力隊　大川奈奈

はじめに

第 31 回全国地域リーダー養成塾（以下、「リーダー養成塾」という。）に応募する際、選んだ小論文のテーマは「わが地域の活性化を考える」だった。一年前に書いた文書を読み返し、その思いがどこまで成し遂げられているのか、地域おこし協力隊（以下、「協力隊」という。）3 年目となる今年は、平成 30 年度「地域おこし協力隊ビジネスアワード事業」に採択されたプロジェクトの事業化に向けてスタートする 1 年でもある。リーダー養成塾で学んだことを振り返りながら、「地域資源の活用と組織づくり」をテーマに修了レポートを書きあげることとした。

協力隊として田舎社会に飛び込み、親戚付合いや近所付合いのような柵（しがらみ）もなく 2 年間自由に活動してきたことが､｢地域づくり｣として良い結果を生むのかどうかは、これからの 1 年にかかっている｡今まで培ってきたスキルでは乗り越えられない壁があり、それを突破するためには学ぶしかなかった。地域づくりの現場にいる人達の体験談を聴き、地方創生カレッジでのｅラーニングや協力隊の研修、また関連書籍を通して知識を得て来たが、現場で起こる事象は予期できず、学んだ知識では解決できない事ばかりだ。しかし、それを楽しめるようになった 3 年目、価値創造に向けて新たな気持ちでスタートしたい。

１　初めての田舎暮らし

20 歳の頃から里山や田園風景に憧れていた。長野県白馬村に 1 か月間ペンションのアルバイトに行っただけで、別れが悲しく号泣したことを鮮明に覚えている。現在は、「田園回帰」と言われているように、このような体験から就職先の選択肢として田舎を求めて就職する人も少なからず増えてきたようだ。かつての高度成長期には、グローバルな社会に目が向いていた私は、都会に憧れ東京に人生の展開を求めた。活気ある都会へ、満員電車も苦にならず雑踏の中でストレスを抱えながら仕事してきた。第一線で働くことで自分自身のモチベーションを上げ、数多くのことを吸収してきたことは良い経験であったが、“家族の絆”や“ゆとりの時間”を犠牲にしてきたのかも知れない。紆余曲折ありながら、

山桜が美しい里山

都会の生活を終え、憧れの田舎暮らしをしたいと思うようになった。

2009 年、総務省によって制度化された「地域おこし協力隊」も 10 年目を迎え、全国に 5,000 人以上の協力隊員が活躍し、世の中に浸透して来た。私自身、その言葉を自分事として受け取ったのは 2017 年 10 月だった。

20 歳に兵庫県明石市から東京へと移り住んで以来、仕事に没頭し、子育てをしながらも働き続けるほど仕事が好きだった。40 歳で独立し、ギャラリーカフェや会社経営もしてきたが、60 歳に差し掛かる前に、これからの生き方について真剣に考えた。その時、ライフワークを「桜と共に生きる」と決めた。「日本の日常の美」を世界に発信したいと思っていたため、日本を代表する花「桜」に注目し、桜に関する仕事で活躍できる場はないかと思うようになっていた。

ちょうどその時、名前そのものが「桜」である当市で、右記のような内容での協力隊募集が行われていた。好運にも採用され、2018 年 2 月、協力隊として着任した。

「本当に住みやすい街大賞 2019」の 1 位に輝く埼玉県川口市から、7 年連続「都道府県＆市区町村魅力度ランキング」最下位の茨城県へ転居してきたのは皮肉な話であるが、人生初の田舎暮らしは都心から 2 時間、車さえあれば全く不便のない、適度な田舎で里山風景が楽しめる桜川市で満喫している。都会好きだった私が「自然と共に生きる田舎はいいところよ」と声を大にして言えるようになった。

＜桜川市地域おこし協力隊の募集要項における活動内容＞

（1）「ヤマザクラ」と美しい桜の里を保全する活動

（2）重要伝統的建造物群保存地区に選定されている「真壁の町並み」や、市内を南北に走るサイクリングロード「つくば霞ヶ浦りんりんロード」などを活用した誘客・交流活動

（3）その他、地域の課題に応じた活動

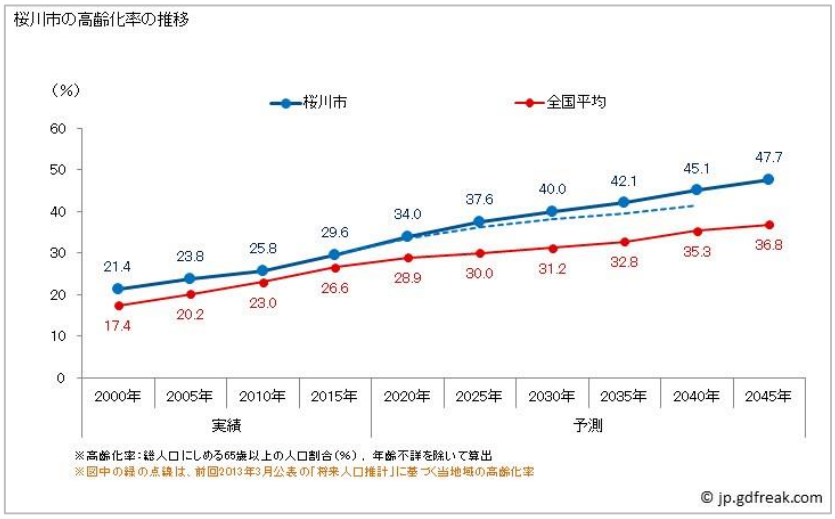
※ 希望や適性等を考慮したうえで、従事する活動内容を調整

※ 上記活動のほか、桜川市が実施する PR 活動等も行う

桜川市の位置

2　桜川市の概要

当市は、平成 17 年 10 月 1 日に、岩瀬町・真壁町・大和村が合併して誕生した、茨城県の中西部に位置する「日本一のヤマザクラの里」である。総面積 180.06 ㎢で、北・東・南の三方を山並みに囲まれ、南には関東の名峰「筑波山」がそびえ、市の中央部を南北に、市名の由来にもなった「桜川」が流れるなど、豊かな自然環境に恵まれている。かつては山から採れるみかげ石の一大産地で石材業や、平野部の肥沃な土地を利用した農業など、地域資源を活用した地場産業が盛んであった。しかし、お墓や建築資材として石が使われなくなり、石材業は極度に衰退し、農業の担い手不足により耕作放棄地が増えている。人口減少も歯止めがかからず、この 1 年の人口減少率は△2.1%で、当市は茨城県内でワーストワンの市となっている。また、総務省の統計データでの高齢化率も全国平均を上回っている。特に若者の転出が著しく、仕事は桜川市内であっても、住む場所は隣接するつくば市や筑西市を選んでいる。



桜川市の高齢化率の推移
出典：総務省 国勢調査及び国立社会保障・人口問題研究所 将来推計人口、
総務省 住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数を基に GD Freak!が作成

3　よそ者が見つけた資源の価値と伝え方

このような桜川市において、協力隊 1 年目の春、桜の咲く時期にはヤマザクラの里山でハイキングやサイクリングのイベントを企画し楽しんでいたが、地元の方から地域おこし協力隊担当課へクレームが入った。その時は、里山でイベントを行うことが何故悪いのかと思いつつも、関係者には一言断っておくことが必要だと知った。未だにどこまでが“お断わり”のラインなのか悩むが、人の顔が見える田舎社会においては、“徹底的に信頼関係をつくることが重要”だと考え、とにかく 1 年間は誠実に行動し、信頼関係の構築に専念してきた。

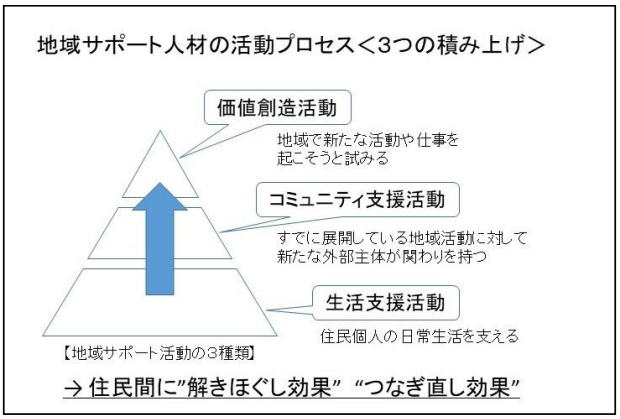


図 1「農山村地区の振興と担い手づくり（図司直也）」資料

「地域サポート人材の活動プロセス<3 つの積み上げ>」では、「マンネリ化している地域にさざ波を立て、住民間に“解きほぐし効果”や“つなぎ直し効果”をもたらすのが、外部サポート人材の役割でもある」ことをリーダー養成塾の講義の中で学んだ。その<3 つの積み上げ>は、図 1 の通りである。

私の場合は、協力隊 1 年目の後半以降、農産物直売所（以下、「直売所」という。）の運営に関わってきたことや定期的にマルシェを行ってきたことが、「生活支援活動」と「コミュニティ支援活動」に当てはまったように思う。直売所は、その地区に入り住民とのコミュニケーションを図るための重要な場であり格好の機会だった。この「直売所」は、自分が活動拠点としている大泉地区での重要なキーワードとなるため説明しておきたい。

桜に関する地域づくりを望み当市の協力隊となった私が、なぜ直売所の運営に関わることになったのか。それは、地域の課題に向き合わねばならないと考えたからだった。

直売所は、平成 20 年 7 月に「農山漁村（ふるさと）地域力発掘支援モデル地区」(注 1)に認定され、行政も力を入れて整備したエリアに建てられた地元の協議会が運営する農産物直売所であった。最初の数年間は行政のバックアップもあり賑わっていたが、首長の交代や担当者の異動などで、いよいよ住民の力で運営しなければならなくなってから、売上は下降し、イベントも出来なくなっていった。

協力隊として私が訪れた時には、店舗の運営スタッフ一人だけで週に 6 日開店という驚くべき状態だった。私もしばらくは他人事のように思っていたが、訪れる度にこの直売所の存在意義を感じるようになった。当初描いていた八重桜の丘のビジネスプランに直売所のことを加えたプランとし、平成 30 年度「地域おこし協力隊ビジネスアワード事業」に応募し採択された。プランの中で、私は八重桜の並木がある日当たりの良い素晴らしい景色の丘を「大泉さくらガーデンヒルズ」というオシャレなネーミングにした。

大泉さくらガーデンヒルズの全面より撮影
（写真提供：坂野秀司氏）

ある時、地元の人から「葉っぱと同じ色の桜だから目立たず綺麗じゃないから切った方が良い！」と言われたことがあった。その葉と同じ色の桜は、“ウコンサクラ”と”ギョイコウ”であり、並木にするような桜の木ではない。桜の花や葉は化粧品の原料に活用できることや、八重桜の花（主にカンザンやフゲンゾウ）を採取し業者に販売している農家を視察したこともあり、桜をお金に変えることが出来ると伝えた。例えば「葉っぱビジネス」で一躍有名となった徳島県上勝町のように、地元の方々が八重桜を大切に手入れし、花見が終わったら花を、夏が終われば葉を採取し、稼げるビジネスモデルに出来るのだ。

昨年春には、試験的に 25 kgのウコンサクラの花を採取し原料メーカーに販売した。今春には、既に 200kg もの量を受注している。地元の方々と一緒につくり上げる「六次産業化」の地域づくりに、不安を抱えながらも一歩踏み出せた。

さらに、自分自身のオリジナルの企画として、地元の桜の葉から抽出したエキスを入れた無添加石鹸を「桜川のせっけん －さくら－」として平成 31 年春に商品化できた。茨城県で開催された国体のノベルティや国際交流のお土産品として採用されたほか、都内ショップイベントでの出品販売、協力隊のマルシェでの販売などを通して着実に広まっており、今後も引き続き営業活動を進めていきたいと考えている。

桜川のせっけん －さくら－

このような実践から分かったことは、地元の方々に対して大きすぎる夢を描くと、“絵に描いた餅”と映ってしまうが、現実的なことに落とし込んでいくと、次第に理解してもらえるということだった。自身が発案した「大泉さくらガーデンヒルズ」の企画に対して地元の方々の反応は薄く感じるが、地元にある何気ないもので商品が完成し、それに商品価値があることを示すと目を輝かせていたことがとても印象的だった。このようにして、住民との関わりの中から信頼関係が生まれ、私にとってはかけがえのない方々となっていった。

４　人が動くための仕組みづくりの難しさ

ここまでの基礎作り（<3 つの積み上げ>では「生活支援活動」）の上の、「コミュニティ支援活動」の段階に入るが、私の場合は、直売所の運営サポートや八重桜の保全活動を地域の課題に取り組む人たちと協働で行うことで、基礎作りと「コミュニティ支援活動」を同時進行で積み上げていったように思う。

（1）　直売所の運営サポート

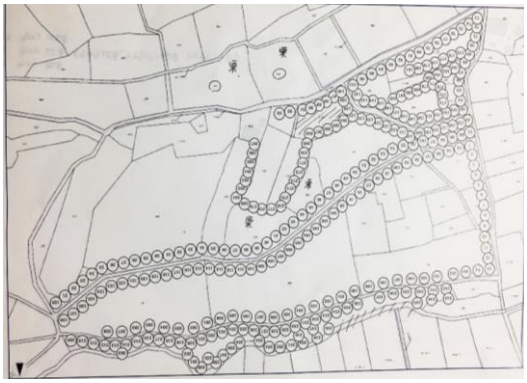
平成 31 年 2 月から令和元年 12 月までの 11 か月間、直売所の運営サポートを行った。直売所については 3 章でも少し触れたが、私が思い切って直売所の肝に入っていったことで、直売所の体制が動き、協議会から任意団体に経営が引継がれた。資金は全くなかったため、最低限のリニューアルでのスタートだった。直売所の立地は、栃木県との県境で県道に面しているため車の通りは多い。のぼりの数を増やし、プランターに花を植え目につきやすいよう工夫した。直売所のすぐ裏の畑を借りて「ハーブ実験畑」にしたり、蕎麦刈りの体験や酵素ジュースづくりのイベントも行った。サイクリングツアーの企画も実施した。夏に蒔いた種で秋には秋桜を楽しむことができた。しかし、振り返ってみると、直売所と周辺を盛り上げようと思いやってきたことは、地元の方々が望んでいることではなかったのかもしれない。参加するのは、集落外の私の知り合いが中心だった。

直売所の運営をスタッフ 1 名から 3 名とし、店の雰囲気も明るくなったことで客足が伸び、売上も確実に伸びていった。しかし、スタッフが増えることによって人件費が増し簡単に利益は上がらない。私には野菜の知識や直売所の運営ノウハウはなかったが、店の開け閉めや経理業務などの事務作業を出来る範囲でサポートしてきた。

今後、ヒアリングなどを通して地元の方々との交流を深めていくことが、私の大きな課題のひとつである。

（２） 桜の保全活動

「大泉さくらガーデンヒルズ」の八重桜は、平成 21 年から 3 年間に渡って、「公益財団法人日本さくらの会」の“宝くじ桜寄贈事業”によって植樹されたものである。約 250 本の八重桜を保守し続けてきた地元の方々の努力があってこそ、春には美しい姿を見せてくれる。しかし、小高い丘になっているため、道路からは見えにくく、あまり知られていないため、訪れる人は少ない。4 月下旬に開花するため、関東エリアではお花見が最後まで楽しめる場所でもある。中には「御衣黄（ギョイコウ）」という黄緑色の花や「鬱金桜（ウコンサクラ）」という透き通るようなうす萌黄色の八重桜の花もある。



大泉さくらガーデンヒルズ
八重桜の並木の図面

地元の方々は、花が散り葉が出て発生するケムシを駆除するための殺虫剤散布、夏には下草刈り、冬には枝の剪定を行い保全し続けている。微力ながら、私も保全活動に参加し、番号が付与されている並木の調査も行った。

（３）価値創造活動に向けて

協力隊 3 年目となる 2 月から、<3 つの積み上げ>の最後の段階である「価値創造活動」に入っていく。大泉地区の方々との信頼関係を深めながら、他地区の方々や行政とのバランスを取り、地域運営組織をつくることが必要になってくると考えている。私ひとりの思いでは、地域資源を活用した事業は不可能である。今後、地元ならではの風習や土地の使い方など様々な壁にぶつかるだろう。よそ者だからこそ壁を上手く突破し、持続可能な事業を創出していくための“仕組みづくり”や“組織づくり”は必須である。

直売所の経営は厳しい状況であるが、地元の区長や地域リーダーは小規模でも存続させてほしいと考えていることや、安価で新鮮な野菜を買いにくるお客様がいること、近隣で農業を続けている高齢者の野菜出品の場となっていることなどを理由にどうしても続けたいという思いで、任意団体として直売所を続けている。

大泉さくらガーデンヒルズ

一方、直売所の背後にある八重桜の丘（大泉さくらガーデンヒルズ）は、前述したように、10 年

前に整備された 2 町歩の丘で、上部まで道路と水道が敷かれており、筑波山と加波山が連なる連山を一望できることから、さらに手を加えることでグリーンツーリズムの拠点として蘇らせることが可能だろう。様々な壁はあると思うが、茨城県の六次産業化プランナーなどのサポートを受けながら、出来るところまでやってみる覚悟だ。

これからは、直売所の運営からは一線を退く。当初から私が描いていた「大泉さくらガーデンヒルズプロジェクト」のビジネスプランに共感してくれる人たちをはじめとした外部の方々との連携により、行政への働きかけや市内の関連業者と意見交換をする中で、これまで停滞していた状態から抜け出せたように思う。これからは、地元の方々への配慮のもとで、周囲の賛同者との協働によって、「地域資源を活用した持続可能なグリーンツーリズム事業」と、当市には欠かせない「桜の保全活動を軸にした市民ネットワークづくり」の 2 つの事業を、協力隊 3 年目の課題として取り組んでいきたい。

５　大泉さくらガーデンヒルズプロジェクト構築の提案

「地域づくり」のストーリーは、住民の意識改革のために度重なるワークショップを行い、地域住民がゆるやかに参加していく事例が多い。しかし、今ある暮らしに危機感や大きな問題もなく、別段変革する必要はないと住民が考えている地域では、社会貢献活動が好きなシニア世代がいない限り、「地域づくり」をするという雰囲気はなかなか起こってこないだろう。10 年・20 年先のことを心配しながらも、何か行動を起こす術もなく、日々淡々と過ごしているようにみえる。今より若かった 10 年前には、希望を持ち、集落を挙げて活性化しようとした方々でさえ、今は諦めのムードが漂っている。思うようにいかなかった経験があればなおさらなのだろう。

そのような地区では、具体的なビジネスモデルを示すことで、住民に共感してもらえるのではないだろうか。

その中で、「大泉さくらガーデンヒルズプロジェクト」の今後の事業展開として、下記の 2 つの事業を提案してみたい。

提案１：地域資源を活用した持続可能なグリーンツーリズム事業

地方から首都圏に人口が流出している一方、内閣府世論調査「東京都在住者の今後の移住に関する意向調査」では、約 4 割が“移住する予定”又は“今後検討したい”と考えているという結果がでている。移住希望は、特に 10・20 代 の若い世代の男女や 40 代の男性で高い結果となっている。また、ふるさと回帰支援センターの調査結果では、地方への移住相談件数も年々増え、「地方移住＝田舎暮らし」というイメージから脱却し「地方都市暮らし」のニーズが高まっている。

当市の南側に隣接する石岡市では、農業体験を希望する都市部の小中学校を受け入れている「朝日里山学校」の実績として、令和元年度には延べ 2,830 名が利用している。口コミで年々利用者が増え、今後も伸びる傾向にあるそうだ。また、当市の東側に隣接する笠間市では、「笠間ふれあい体験旅行」を実施し、平成 30 年度のデータでは、受け入れ民家は 190 軒（実数 100 軒)、利用者数は 693 名（うち海外から 64 名）により、笠間への経済

効果は 400 万円以上となっている。

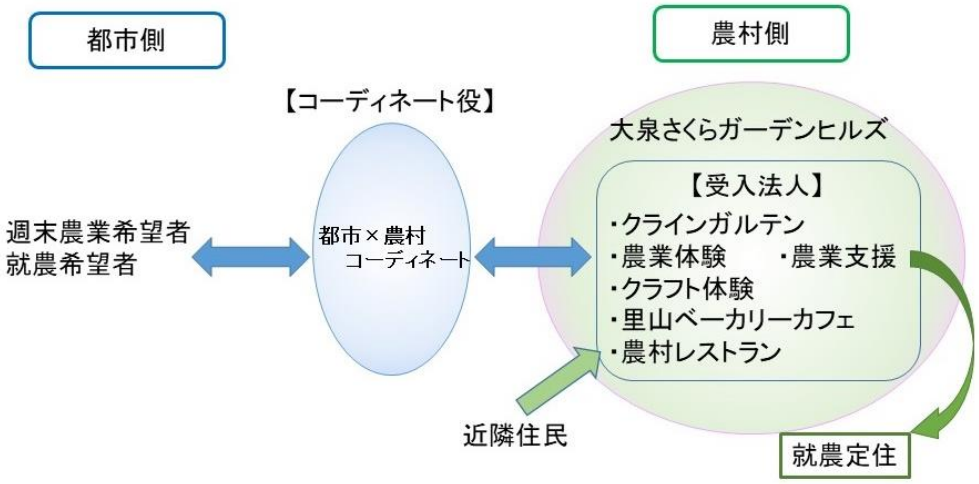
このような動向から、当市もまた、移住先や就農先、農業体験などの可能性がある自治体として、受入体制を整えていかねばならないと考えている。

その最初のステップとして、大泉の資源を活用したグリーンツーリズム事業を提案したい。大泉地区は、北関東自動車道の筑西・桜川ＩＣから 10 分と交通の利便性の高い場所にあるため、首都圏からの来訪者を呼び込める。週末農業希望者向けのクラインガルテンや農業学校との提携により集客が期待できるだろう。また、週末や祝日の日帰り観光客向けの農業体験やクラフト体験ツアー、平日でも集客できる里山ベーカリーカフェや農村レストランの営業も形にしたい。

この事業を実現させるために、まず「農村側」の受入体制をつくっていかねばならない。当市内で有志が集まる「グリーンツーリズム会議」や賛同者の方々に呼びかけて「大泉さくらガーデンヒルズプロジェクト準備委員会」を発足し、行政との調整を行いながら、地元住民への説明会を開催し、合意が得られれば、令和 2 年度より専門家の指導の下調査業務を行い、より確実性の高いビジネスプランを作成し進めていく。

「都市側」とのコーディネートは自身の得意とする分野であることから、都市部の企業や自治体、ふるさと回帰支援センターなどの移住相談窓口や農業大学校などからニーズを引き出し、農村側に繋いでいきたい。

また、グリーンツーリズムを取り入れた地域づくりの成功事例として、群馬県の「川場田園プラザ」が取り上げられるが、「農業×観光」が当市の地域資源を活かすための唯一の方法であると考えているため、参考としたい。



「都市と農村を連携するプロセス」イメージ図

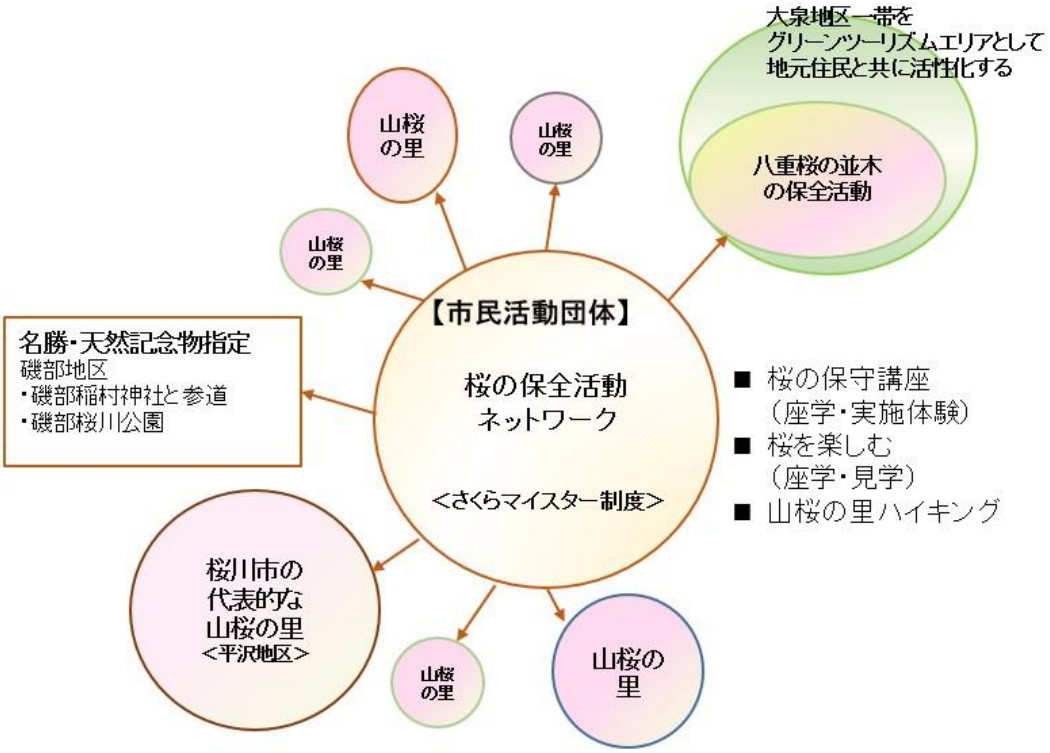
提案２：桜の保全活動を軸にした市民ネットワークづくり

当市は、「日本一のヤマザクラの里」であり、自生するヤマザクラが美しい里山である。中でも磯部地区の磯部稲村神社と参道を含む公園一帯が名勝に指定されていると共に、ヤ

マザクラが「桜川のサクラ」として天然記念物にも指定されている。近年衰弱・枯木が目立ち保全活動が急務であるため、「桜川市ヤマザクラ保全活用計画」により、指定地域の調査や今後の保全活動計画が立てられている。また、里山整備の実施計画も挙げられており、“桜川らしい里山景観づくり”を目指して推進している。

現在、集落ごとに桜の保守が行われているが、当市全体の連携がとれていないため、一体感がなく盛り上がりに欠けている。桜の保全活動グループのネットワーク化や参加者を呼び掛けていくことによって、当市全体としての体制づくりができるだろう。

先の「大泉さくらガーデンヒルズ」のグリーンツーリズム事業に着手しながら、同時に当市全体の桜のネットワークづくりを有志と共に実現していきたい。



「桜の保全活動を軸にした市民ネットワークづくり」イメージ図

おわりに

「地域づくり」には “よそ者” の貢献度が大きいとよく聞くが、現場では相当の葛藤がある。「風土」という言葉があるが、オギュスタン・ベルクの「風土の日本」や和辻哲郎による「風土論」になぞらえ、外から関わる人を「風」、その土地に根づく人を「土」に例えて、両者が混ざり合い土地の風土は創られていく。しかし、国を挙げて取り組んでいる「地方創生」のことを、地元で理解している人々はどれくらいいるだろうか。リーダー養成塾で学ぶトップレベルの諸先生方の話には惹きつけられるが、地元に帰ると「地方創生」の言葉など理解されない世界が広がっている。この温度差をどのように埋めるかも課題である。地域によそ者を受け入れる体制があれば、新しい風土がつくりだされ賑わいのある

まちへと変わっていく。

今、「地域は選ばれる時代」である。人々がこれほど柔軟に移動し、暮らす場所も自分で決められる自由度が高まっている日本において、選ばれる地域にならなければ、この先取り残され、過疎化が進むだろう。協力隊最終期となる 2020 年は「地方創生」の必要性を説き、当市の住民が新たな気持ちで一団となって「地域づくり」に取り組んでいくことを願っている。

(注 1)　農山漁村（ふるさと）地域力発掘支援モデル事業：
農山漁村地域力発掘支援モデル事業とは、地域住民、都市住民、NPO、企業等の多様な主体を地域づくりの新たな担い手としてとらえ、これらの協働により「農山漁村生活空間」を保全・活用するモデル的な取組を直接支援する事業。平成 20 年・平成 21 年の 2 年間のみ行われた。

【引用・参考文献】

・桜川市ホームページ：
http://www.city.sakuragawa.lg.jp/
・茨城県ホームページ統計データ：
http://www.pref.ibaraki.jp/kikaku/tokei/fukyu/tokei/betsu/jinko/nenpo/jinko30.html
・川場田園プラザホームページ：
https://www.denenplaza.co.jp/
・桜川市ヤマザクラ保全活用計画
・まち・ひと・しごと創生長期ビジョン（令和元年改訂版）
https://www.kantei.go.jp/jp/singi/sousei/meeting/honbukaigou/r01-12-20-shiryou1.pdf
・認定 NPO 法人ふるさと回帰支援センターの調査
http://www.furusatokaiki.net/wp/wp-content/uploads/2019/02/webnews20190219_furusato_ranking.pdf
・朝日里山学校の農業体験受入実績
・笠間ふれあい体験旅行推進協議会だより「であい・ふれあい No.1」
・椎川忍他『知られざる日本の地域力』今井出版、2014 年
・図司直也「農山村地域の振興と担い手づくり」全国地域リーダー養成塾講義資料